

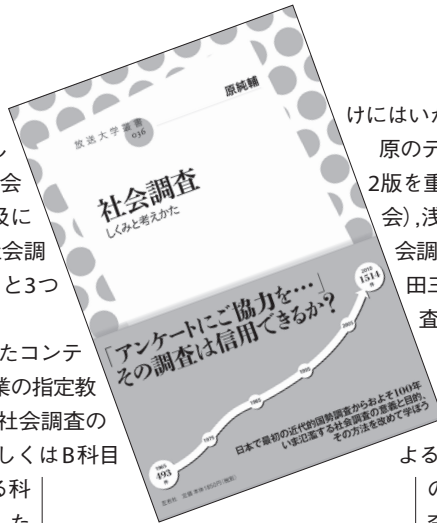
社会調査についての書籍は、近年大幅に数を増している。これは、社会調査協会の社会調査士資格制度の普及によるものだろう。そうした社会調査関連の本は、大きく分けると3つに分類できる。

第一は資格科目で指定されたコンテンツを手際よくおさえた、授業の指定教科書である。これはA科目（社会調査の基本的事項に関する科目）もしくはB科目（調査設計と実施方法に関する科目）の全15回の講義を想定したものが多く、いずれも規定の事項を論じるなかで、さまざまな話題を取り入れる工夫がなされている。

第二は、そうした資格科目の参考図書として位置づけられるものである。授業を担当する者にとっては、正しい学説、さまざまな先例、最新の動向、統計解析の基礎を手早く教える「引き出し」を多く持っていることは重要である。おそらく科目担当者は、それぞれが自分だけの「ネタ」を持っているのではないと思う。受講生にとっても、授業で触れられない深い知識を求めて、より専門性の高い参考図書を読むことは重要である。そうしたニーズに答えるのが、社会調査の詳細な知識を教える教本（ハンドブック）である。その最たるものが、『社会調査事典』（丸善出版）であろう。

そして第三に、「社会調査とは何か」、あるいは日本の社会調査のメインストリームはどこにあるのかを論じる定番本というべきものがある。本書はここに位置付けられる書籍であろう。

本書内では執筆の経緯として福武直の『社会調査』（岩波書店）に触れているが、その福武直、そして安田三郎以来の日本の社会調査の本流を語るとき、本書の著者である原純輔の名前を挙げないわ



けにはいかない。

原のテキストといえば、海野道郎との共著で2版を重ねた『社会調査演習』（東京大学出版会）、浅川達人との共著で同じく2版ある『社会調査』（放送大学教育振興会）、そして安田三郎のテキストを受け継いだ『社会調査ハンドブック 第3版』（有斐閣）がよく知られている。評者の世代からみると、現代日本の社会調査の基礎を築いた人だといえる。本書は原による、その名も『社会調査』という決定版のテキストである。現代日本の社会調査の正統な本流を示す書籍だといえるだろう。

ところで佐藤健二の『社会調査史のリテラシー』（新曜社）は、往年の社会調査の定番本である安田の『社会調査ハンドブック』の年代ごとに変遷する各版の内容が異なることを挙げ、日本の社会調査教育の歴史を論じている。評者は、原の社会調査論についても、同様の社会調査史研究ができるのではないかと考えつつ本書を読んだ。

内容を紹介しよう。本書は6章構成である。そのコンテンツは、「社会調査の性格と用途」、「調査票と面接調査」、「標本と母集団」、「集計・分析・報告」、

「さまざまな社会調査」、「社会調査の現在」となっている。順序良く社会調査の基礎の紹介が進められるが、そのなかでとくに、なぜランダム・サンプリングが重要なのか、個別訪問面接聴取法の有効性、どうして回収率が低くなっているのか、統計的推測の基礎、新しい技法の位置付けなどについては、原の見解が明示されており、強調すべき事項にメリハリがつけられているのが読者の関心をそそる。他方で、原自身が主導した調査のデータが随所で例示され、かつ旧来のテキストで示されてきた、ホーソン実験、ギャラップ調査、アメリカ兵の例なども適切な語り口で示され、これもたいへん参考になる。多くの社会調査士諸氏に、ぜひ一読を薦めたい。

社会調査

しくみと考えかた

原 純 輔 著

左右社
2016年
B6判, 256ページ
1,998円